

青森開港400年。ゆかりの地を巡る旅

弘前藩が1625(寛永2)年、青森～江戸間の廻船就航許可を幕府から得た、いわゆる「青森の開港」から今年でちょうど400年。その翌年、現在の青森市中心部にあたる地域の町づくりが始まりました。今回は、長い年月や太平洋戦争の青森空襲、戦後の開発などを経てもなお市内に残る、江戸や明治時代のみなとまち・あおもりの痕跡を探す小旅行にご案内! 図 歴史資料室(☎017-734-5271)

津軽から運んできた米を米蔵に貯蔵。善知鳥神社の現境内の東側部分には江戸時代の一時期、弘前藩の蔵屋敷がありました。



弘前市立弘前図書館蔵「青森之図(青森御町絵図)」

1670年代の絵図によれば、善知鳥神社の参道は東側ではなく南側(新町)方向に延びていたようです。

(青森屋敷(御飯屋)) 御飯屋とは、藩政時代に藩主(お殿様)が外出の際に宿泊所として使った施設です。



御飯屋跡碑(青森県庁敷地内)



ポイント1 「青森町」は何のためにつくられた?

弘前藩の米を船で江戸に運ぶため。米蔵や水路なども造られた。



↑かつて米町と呼ばれた地域を案内する工藤室長

弘前藩が「青森町」の町づくりに着手したのは、津軽地域の米を江戸に運ぶためでした。藩は1626(寛永3)年に家臣の森山弥七郎に町づくりを指示。この時藩庁は、陸奥湾沿いに東西に延び、そして碁盤の目状の町割りを施しました。さらに、自然の水の流れを活用するほかに、掘り割りを作りました。こうしてできた青森の街並みは江戸時代の海域にみられる港町の特色を備えていて、現在もその痕跡の一部をたどることができます。なかでも、米町の東西を走る掘り割りは、堤川の西側を流れる蜷貝川とともに、米蔵に集められた年貢米を沖に碇泊する船まで運び出す際に活用されたとみえています。

今回お話を聞いたのは...

江戸時代
専門です



青森市民図書館
歴史資料室
くどう だいすけ

工藤 大輔 室長

北海道出身。東京での大学院生時代、青森市史編さん事業に従事するために青森市へ。以後、市史、青森県史などの編さんに携わってきた。同市の歴史講座の講師なども積極的に務める。

ポイント2 江戸期の「青森町」には何があった?

中心部には米や船の間屋がずらり。町外れには藩主の宿泊所も。

江戸時代の青森町は、概ね西端が現在の青森駅付近、南端が現在の国道4号・7号付近、東端が堤川という狭い区域でした。工藤大輔室長によると、その区域は概ね3つに分けることができ、西部が現在の青森駅付近から善知鳥神社付近まで。中央部が善知鳥神社と現在の平和公園通りの間。東部が現在の平和公園通り付近から堤川までです。

中心部には、米の集積と江戸への運搬に関わる米問屋が集まった「米町」、廻船問屋が建ち並び「浜町」などが形成されました。青森町の中核を担う米町・浜町などの中央部には、江戸期には伊能忠敬やジョン万次郎、明治期には森鷗外など、北方への渡航のため多くの著名人も宿泊しました。

一方、青森町の南側、現在の青森県庁付近にできたのが、弘前藩主の宿泊所である「御飯屋」です。当初は、蝦夷地(現在の北海道)で起きた松前藩とアイヌの戦いの後、北方の有事に備えた軍事的性格をもつ施設でした。



←御飯屋跡碑

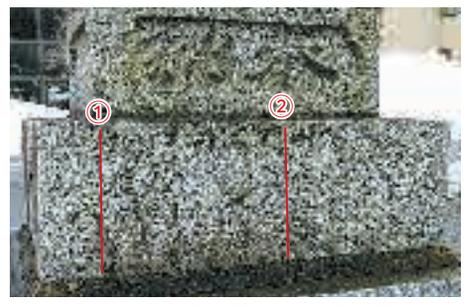
ポイント3 町を守っていた神社(現在の香取神社)から何が分かる?

狛犬に江戸期の商人名が並ぶ。北前船と深い関わり。

青森市郊外の幸畑団地近く、大矢沢の香取神社は、現在の長島地区にかつて立地し、青森総鎮守「毘沙門堂」という青森町の守り神でした。明治期の神仏分離で香取神社となり、1991(平成3)年に現在地に遷宮しましたが、江戸・明治期などに奉納された石碑などが今も残っています。このうち、幕末の1849(嘉永2)年に奉納された狛犬には、加賀藩の「銭屋」、青森の「滝屋」といった商人の名前がずらりと刻まれ、北陸・関西から蝦夷地までの北前船の交易などの商人ネットワークで青森の町が栄えたことを物語っています。



↑1849年奉納の狛犬には加賀や青森の豪商の名前も



↑①銭屋八十吉 ②滝屋善五郎